

昭和三十四年七月二十三日 第三〇〇便物認可  
昭和三十四年八月十五日 發行 (毎月一回・十五日發行)

(通第一三三號)

# 慈光

第十卷 第八號

## 目次

至心廻向の意義(一)……………	近角常観……………(1)
近角常音先生聞記……………	吉田延世……………(7)
常音先生をお偲び申して……………	花田正夫……………(12)
恩徳広大近角両先生……………	三瓶徳英……………(16)
檀山節考を見て……………	室住熊三……………(20)

# 至心廻向の意義(一)

## 近角常觀

此の度私が石見に参りまして、多くの人が驚きを立ててお喜び下された事は実に著しき様であつた。何故このやうに多くの方がお喜び下されたかといふに、それは唯一ヶ所である。其の一ヶ所が実に信心上大切なる処故、其点を初めに話し、夫れより漸次私が近頃喜ばせて貰つて居る、阿弥陀仏の御本願、至心信樂衆欲生の三心に就き、お話致します。

さてそのやうに石見の国の方が著しく際を立ってお慈悲を喜ばれた其の点は何処であるかと申すに、今申す如く唯一点である。それは何処かと申すに、仏が私共を助け救うて下さる、可愛がつて下さる、哀んで下さるといふ事は、皆一応聞いて居らるのであるけれども、其の仏の助けを下さる、哀んで下さる、といふ事が軽く受けられて居る。阿弥陀仏が超世無上の本願を起し、五劫兆載永劫の深き御

心配を私共の爲にして下された、と云ふ肝腎の処を皆聞き落して居るのである。之が此度石見の多くの人が驚きを立てられた点である。

これは必ずしも石見の人ばかりに限らぬ。誰しも仏のお救ひ、お助けである事を知らぬ人は無く、仏が悪人を助けんと仰せである事は、皆聞いて知つて居らるる、けれども肝腎の仏の遣る瀬なき所を頂かぬからして、其のお助けをお救ひが軽き事になつて仕舞つてある。

先づ誰しも前に申さるるに「如来は此の浅間しき者をお助け下さる。この横着の者を哀みお救ひ下さるのである」と、これだけは誰方でも皆言はれるのである。而して真にこの横着の者を、この浅間しき者をと頂けてあるかといふに、頂けて居ないのである。

殊に今度、石見の国の人が多く驚かれしは、私が多くの

人に申ししたに

「成る程あなたはそのやうに喜ばるるが、如来の慈悲はそのやうな軽き事にあらず。仏の哀れ、不慙と思召し下さるは、我々の思ふ如き一応二応の事ではない。先づあなたが一家の中で暮さるる時、人に隔つる心起り、人に不足の思ひがあるであらう。其の胸中の人を疑ひ、隔て、不足に思ふ根性は、之を人にも告げられず、心で独り苦しんで居るのであらう。今大悲の親様が助けるとの仰せは、吾々が一応悪いから助けるとの仰せではない。我々の胸中に、斯く人を疑ひ、隔て、憎み、突き落す、悪しき心がありて苦しんで居る。其の根性を大悲の仏は能く御承知下され、その如何にしても悪心のやまぬ、浅間しき処を御存知下され、其の悪しき心のやまぬのが可愛相と言つて下さるのが大悲の親のお心である。言ひ換へると、汝の胸中には、この隔て心があるであらう、我はその隔て心の有る事を能く知つて居る。汝の心には斯うくの貪瞋煩惱が起るであらう、我は能くそれを知つて居る。その疑ひ、隔ての心を取り度いと迄は思ふであらうも、その無く仕度い心を如何にしても無くせぬであらう、我はそれをも能く知つて居ると、私の心の底まで知し召し下され、其の悪しき心を取りし、人を疑ひ隔て、居るのが如何にも不慙で見捨てられぬと、斯く遣る瀬なく思召し下さるのである」

と、この一ヶ所である。茲が最も肝腎であります。

大抵の人が頂いて居らるるのは「斯くの如き悪しき心がありても、仏はお助け下さるのだ」と頂いて居らるるもの故、その悪しき心は悪しき心でいつ迄も残り、お助けはお助けで別々になりて仕舞うてある。而してその悪しき心の止まぬのが哀れ、見捨てられぬとある広大のお慈悲なる事に気がつかぬ人が多いのである。

私は今度、石見に参りて多くの人にお話した。多くの人が、お慈悲は有難い、恵みが有難い、と喜んで居らるるのであるも、この胸中の止むに止まぬ悪しき根性、それが大悲の涙のもとなることに気がついてゐなかつた。

二三の例を申せば、或人はこの世は当にならぬ、我々が思ひと思ふ事に、一つも善い事は無い、我々が有難いと思ふのも当にならぬ、と唯当にならぬと言ひて、夫れが信仰であると思つて居られた。

それで私は申し「唯あてにならぬと言つて居る丈では仕様が無いではないか、その当にならぬ者を、お見捨て無いのが、広大のお慈悲で無いか」と。地方に行つた時、ことに申すはここである。

地方に行つた時、最も多いは、自分はお慈悲頂いてるか自分には正しいと思ひ、自分は正しいが、家の者なり、世

間の者なりが、それを認めてくれぬ故、人に対し不足の思ひが起る。併し自分はお慈悲頂いてるから、人を悪しく思うてはならぬと諦め、じつと我慢して、此の世はいつ迄も斯うだと思ひ、喜ばせて貰つて居るといふ人が一番多いのである。これは未だ真に頂けて居ないのである。

我々は自分が正しいのでは無い。第一斯く人を隔て不足に思へるといふが、既に頼む可からざる者を頼みにして居るからなのである。人よりも自分が善くしてるといふ考で人に向ふから、人よりもその心で向はれるのである。処がその五分五分の浅間しき私の心を御覧下され、その五分五分の止まぬ根性をお見抜き下され、その人を隔て不平の止まぬ五分五分の根性が可哀相で仕様が無いと、私が隔てれは隔てる程益々哀れみ下さる廣大の親心、仏の大悲である、この仏の大悲に遇へばこそ、今迄人を隔て煩悶して居た私の胸中に、あゝ有難や、この浅間しき、して見やう無き私に、其廣大の御親切なる思召しなりしかと、この到り届いて下さる一念に、如何にも申訳無かりしと頭が下るのである。茲が肝腎である。

我々の方を如何程努めても、此の隔て心は去らず、疑ひは取れず、五分五分の根性は止まぬ。この止まぬ胸中を御覧下あれ、汝の悩むはここであらう、あゝであらう、それが可哀相で見居られぬ、との仰せなのである。この仰せ

のである。

之を『歎異鈔』のお示して頂けば、第九章に、天におどり地におどるほどに、喜ぶべきことを、喜ばぬにていよ／＼往生は一定と思ひたまふべきなり。よろこぶべき心をおさへて喜ばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねて知ろし召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり、云々。

「仏かねて知ろし召して」とある。これである。私の胸中に人を隔て、誹り、怒り、ねたみ、有りとある悪しき心が充ち満ちて、これを止めれば可い、善くすればよいとは知れども、止められず、善く出来ぬ、そのために無量永劫迷うて居る、その私の胸中を仏かねて知ろし召して、汝のその胸中が不慙である、仏が涙を絞られた、其処が大悲の根源なのである。

其処でこの者を如何にして助けるかと、これより広大な御苦労がある。ここが我々の想像の及ぶ如き一通りの事に非ず。先きにも申す如く、五劫の思惟といふも、永劫の修行といふも、有り餘る御苦労は一つも無い。畢竟ずるに、皆これ私の胸中に、夫れ程までに大悲の仏を泣かし奉る浅間しき悪業が充ち満ちてあるからである。『歎異鈔』にの

に気付くなり、なが／＼夫程までの遣る瀬なき御親切なりしかと、初めて我々の不まことの心に、飽迄まことにして下さる如来の慈悲を頂き、謝り果てる外無くなるのである。今度石見では色々の場合があり、気の附く人が多かつたが、こぐちをはたから故、一々に言ふ事も出来ませぬ。が一言に言ふと、多くの人の言はるるには「仏のお慈悲は申さんやうもなき御慈悲でござります」と。それも言ひやうにもよるが、中には「申さんやうも無きお慈悲でござります」と言はるる人もあつた。

これでは仏のお慈悲の貴い事は能く聞いてあるが、何となくそのお慈悲が有り餘るお慈悲の如く聞こえ、有るが上にも又重ねて、餘分にお慈悲頂くやうに思はれる。これではまだ真のお慈悲が頂けたのでは無い。全体阿弥陀仏の五劫永劫の御苦労、十劫以来の御待ちかねといふ事は、有るが上にも余分になし下されたお慈悲では無い。五劫永劫永劫の長の御苦労、一念一行と雖も、有り餘ることをなし下されたでは無いのである。夫れは皆、私の胸中に、足らぬ処、缺くる処があり、浅間しく仏の御胸を泣かしめ奉るものが有るばかりに、大悲の親様が御苦労下されたのである。すれば我々の、そのしてみやうなき胸中を、親様の御覧下された処が、実に大悲本願の根源な

たまはく

弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がために候ひけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんと申し召したちける本願のかたちけなきよ。云云。

夫れ故、仏のお慈悲は有り餘つて、申さんやうなきお慈悲でござりますが、では、御慈悲に無駄が出て来るのである。今申す如く、仏の御苦労には無駄なるものとは一つも無い、皆私が悪いばかりに長々苦しめ奉つたのである。而して、この遣る瀬なき御慈悲と聞く一念に

「弥陀の五劫思惟の願は親鸞一人がために候ひけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんと申し召し立ちける本願のかたちけなきよ」

「しかるに仏かねて知ろし召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は斯くの如きの我等がためなりけり」

この業の深き、このやうな者をお見捨て無きお慈悲であつたか。この浅間しき私なればこそ、それほどの御苦労であつたかと、頂かせて貰はれるのである。

なほ分りよく申せば、我々の浅間しき根性は「これを打出して人に話せば人が呆れるだらう」と、一面自分の浅間

しく、して見やうなきを歎きつゝ、なほ他の一面には自分を善いと思ひ、人が自分を善く思つて呉れぬ故、人にかゝることを諷すこと出来ぬなどと、悪しき根性を持つて居るのである。

然らば、人より、汝は善い、悪しくないと言はれて安心出来るかといふに、否、彼はまだ自分の本心を知らない、自分は彼を欺あやまりてるのであると悔くむ。

然らば、人より汝は善く無いと言はれて安心がつくかといふに、又見捨てられたので無きかと心配する。

斯く人の心は、自分が悪いと悩み悲しむかと思ふと、又他より悪しく言はるれば不足の念が起るのである。これがお互ひの心中である。

今大悲の仏の見て下さるは、お互ひのこの心の中を見て下さるのである。而して

「如何とも其の悪しき心が絶えぬであらう。其の悪い汝を、悪いからとて、親は捨てるのでは無い、悪いからこそ、弥々その者を救はずには居られぬのであるぞ」

と呼びつめにして下さるのである。もとより自分の子が悪しくてもよい、病氣でもよい、不具かたじでもよい、道楽でもよいといふ親は世間に一人も無けれども、如何にせん、子供は、今既に病氣であり、不具であり、道楽である。この

ちかねといふ事は、誰がおさせしたのであつたか、皆、私この悪しき根性のためにおさせしたのであつた。夫にもかかはらず、仏はこの私をお見捨てなく今日今時まで、今か、今かと呼びかけ待ち詰めにして下されし、その遣る瀬無き仏の御心であつたか。その汝の為に親はこれ程に心配し、是程手だてして待ちかねて居るのぢやぞとの、その遣る瀬なき親の御心であつたかと、ここを頂かせて貰へば、今の今までそれ程のお慈悲とも思はず、唯仏のお慈悲は有難いで、一通りに聞き流して居た者が、あゝこの悪しき心のためにそれ程までに御心配を掛けたのであつたかと、この一念に頂かせて貰はれるのである。

常に申す娑捨山の喩で申せば、弥々峠に達し、親を捨てて帰らうとする時、親が子供を呼び止めて、「我は汝と別れる覚悟ぢやが、汝の行く先を心配して道々道しるべを仕て置いてやつたから、それを辿つて間違はずに帰れ」と云はれた、其一念に「あゝそれ程までの親心であつたか、実に申訳なかつた、済まなかつた」と親のお慈悲に帰らずには居られぬやうになるのである。

石見の益田町の専光寺の木村師は、従来人に法を説いて、人がお慈悲を間違ひでもする時は、蹴り倒した程のお方であるが、近頃は大変優しくなられ、人に厳しく言う

時、親の思ひは如何に。子供が悪くて可よい、といふことは一つも無けれども、そのしてならぬ事をする奴故、弥々親は大悲の涙を流し、ぢつとして居られぬ。我々の其の浅間しき、悪しき有様を、仏かねて知ろし召し、その煩惱具足の凡夫であるのが可哀想で見て居られぬ、悪しき心の止まぬのが哀れて仕方がないと、……これが五劫永劫の本願のもとである。

若し唯一応のお救ひ、お助け、で助かる者なら、一切諸仏はみなそれである。何も特に阿弥陀仏の御救ひを要せぬのである。

ところが我々は一切諸仏の大悲を以てしてもとても助からぬ奴、ぢやによつてその助からぬのが可哀想である、若し助かる便りの在る奴ならば、捨て、置いてもよいけれども、助かる見込の絶え果てた奴故、いよ／＼見捨てて置けぬと、これより現はれ下されし五劫永劫の御苦勞である。

言ひ換へれば、即ち私が悪いばかりに、長々親様に其の御苦勞をおさせしたのである。而してこれを頂いたと一念帰命である。

其処で、我々は五劫の思惟、永劫の修行といふ事も、昔から聞いて居た。十劫以来の御待ちかねといふ事も疾うから聞いて居たが、その五劫永劫の御苦勞、十劫以来の御待て、人がお慈悲に氣附かる時などは、あとから手を取つて「あゝわしが悪かつた、こらへてお呉れ／＼」と謝りておいでになる。此間も私が泣かされたのは「母の死ぬ時言はれたこと、今思ひ出すと腸にしみわたる」とて話されたことである。

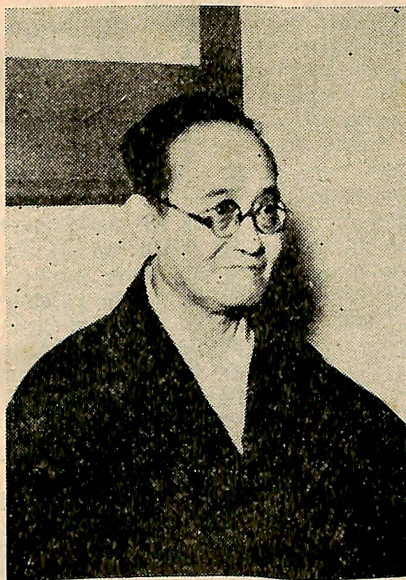
「それは大晦日の晩であつて、母は正月の準備するとして葛藟など切つて居られると思つて見て居ると、急に自分の幼名を呼び、お前の行く先が氣にかゝる／＼と言はれる。自分はそれを二言、三言聞くと、腹の中が苦しくて絶えられなくなり。なに、御心配下さるな、力の限り遣つて行きます、と強ひて言ひは言うたが、それから三時間後に母は急病で死なれて仕舞うた。今それを思ひ出すと腸にしみわたる」

と語られた。私はこれを聞いて泣かされた。

今大悲の親様は、私の行く先が氣にかゝる／＼で長々の間、御苦勞下されてあるのである。五劫永劫の御苦勞はあだやおろそかにあるではない、汝の地獄に墮ちるのが氣にかゝる／＼で、長々の御苦勞、御修行があるのである。その親様の、私の為、氣にかゝる／＼の御心配が長の間、積り積つて、遂に正覚を成就し、阿弥陀仏と現はれ下され、今に待ち受けて下さること既に十劫なのである。

# 近角常音先生聞記

吉田延世



常音先生遺影

## 『難思議往生』

昭和十二年七月二十一日。謹録。

失敗ばかりするものを見ずして、長い目で待つて居られた、思ひも及ばぬ忍耐力と、寛大な親心が有難い。

○ 横浜の前田の爺さんは、一代念仏で明けくれたが、震災に妻を亡くし、家を焼かれ、先日又会館にお詣りせんとして電車にひかれ、怪我をして入院しましたが、念仏してもチツトもよいことがないと愚痴も出るが、その愚痴の出るにつけて、今、そくばくの業を持ちける身を知らされ、有難く思はれて、一層深く聞くやうになつた。

○ 友遠方より来る、また楽しからずやで、お互に同一の御念仏のことを相語り、相樂しむもよけれども、信仰は我身のことである。

○ 人生問題に行き詰つて、それで仏に帰依して、力強く生

きて行かう、人格を高くしよう、折合ひよくして行かうと思ふことは、またかゝることを予期することは勿論一通りならぬ志であるけれど、結局失望落胆する。我身の問題となつてゐないのである。

○ かゝる人は皆自分のことを忘れてゐる人である。信仰は自身の問題である。人生の方法をきくことは信仰問題ではない。

○ 人生に方法はない。如来の慈悲を載くばかりである。如来の御はからひにより方法が生るることあります。

○ 浄土教には大行あり大信あり。これ皆如来より下さる大行大信である。

○ 自分の行をすて如来より賜はる信で行く。念仏は行者のために非行非善なり。如来より賜はる大行大信なり。

○ 浄土教に行なしと云ふことはない。おれがくでなく、御慈悲を頂くのが大行である。

○ 遠方より聴聞に来る人は是非信仰を得たいと大きな期待をして来るし、こちら何としても信仰をとどけてあげた

いと思ふばかりであるが、人間同志ではどうもならぬ。苦しいばかりである。失望落胆のあまり、念仏でも称へませうとなるのが世間のおちであるが、でもとは何んぢや、でもどころではない。

○ この苦しいばかり、失望落胆の外なき者を気の毒に思召されて、どこまでも救はねば止まずとの親心を載け、分相応に本願を頂けとの五劫思惟の結果が南無阿弥陀仏である。法然上人が『乞食の病人に与へ玉ふ粥』である。どんな御馳走ものを通らぬ人々のための粥である。念仏は、重病でどんな薬も効のない人々に与へ給ふ醍醐の妙薬である。

○ 心も言葉も及ばぬ五劫思惟の本願、これ即ち難思議往生の願である。

○ 信を得たと自負してゐる人、信を得たいと焦慮してゐる人、信を得られないと泣いてゐる人、いづれも救はれぬ。

○ いくらお金をやつても放蕩息子に使ひ果して空虚になる。いくらお金をやつてもそれでは救はれぬ、その身ぐるみ引き受けるのだ。そのやうな親は此の世には無い、仏の御慈悲ばかりである。

過去の借金も、現在の借金も、将来の借金も、一切引き  
うけて下さる親さまのお慈悲である。

○ 汝一心正念にして直ちに來れ、一刀兩断、すぐこい、わ  
れよく汝を護らん。お前の生死浮沈のすべてを知らないで  
ゐる親ではない……。

「兩頭を截断すれば」とは「直ちに來れ」といふことなり  
「一劍空によつて寒し」とは「南無阿彌陀仏」なり。

○ 『註』 楠正成湊川の戦に向ふ時、無窓國師をだづねて  
生死の問題を問うた。その時國師は

「兩頭截断して、一劍天によつて寒し」

と答へた。すると死を目睫にひかへたのつびきならぬ正  
成は、なほ

「落処そもさん」

と重ねて問ふと、國師から、唯一言。

「喝！」

この一喝、天地は震動し、正成豁然として徹す。

○ 『報恩講』 昭和十三年十一月二十七日、謹録。

此の身のすべてのことが碎けてしまはなければ信仰心が

此の世のそらごとにつけ、見るに忍びず、末逐げて救は  
なければおかんとの大悲、これは浄土の大行大信で絶対に  
変りはない。

○ この絶対の慈悲の中にありて安心してゐるわけであるか  
ら、身はどうなろうと捨身弘法と精進することが出来るの  
である。

○ 『即是凡敷の攝にあらず』 昭和十四年四月二日、謹録。

○ 永年、信心を得たい〜と聴聞したけれど、遂に得られ  
ず、やけくそになつて、信心を得ようが、得まいが、どつ  
ちが東やら西やら解らぬやうになつた。

○ その時兄貴（常観先生）が言ふには

「いつまでたつても、あいつ（常音先生）の我慢のやま  
んのが、可哀想である」

○ と愚痴を人に繰り返へしてゐるといふことを、人伝に聞  
いたのであるが、それが思ひがけなく生きた人から言はれ  
たのであるが、この事が、仏様の仰せになつて聞えて來た  
のが問題である。

○ 人間と云ふものは、逆立ちになつても、自分の我慢が止  
むものではない。その我慢の止まんのが可哀想であるとい

起らぬとか、念仏が称へられんとか、喜ばれるやうになり  
たいとか、何とかなるだらうとか、……この様なことを  
色々と思はれるのは、何か心に残つてゐる証拠である。如  
來より見れば絶対絶命のものである。

○ そのためにつぶれていくのを見てあはれと思召し捨てぬ  
のお慈悲である。

○ 「我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮することを畏れ  
ざれ」と。

○ 『宗教法家通過を聞きて』 十四年三月廿六日、謹録。

○ 世間は皆よしあしといふことをのみ申し合ひ、戦ひ争う  
のである。

○ よしあしといふことは皆自分でよしと思ふことを出来る  
と思ひ、又悪いと思ふことはいつでもやめられると思つて  
ゐるところから、よしあしをやかましく言ふのである。

○ このよしあしばかりで、そらごとばかりのこの娑婆で、  
ただ一つまことがある。それは念仏である。絶対不二の御  
眞実の念仏である。

○ ふのが兄貴の三十年來の法話である。その話が、気がつい  
て見れば、我慢がとれなくても心配するなどの血の涙の御  
説法であつたのである。これが選択本願で、仏の御眞実で  
あつた。五劫思惟、兆載永劫の御苦勞の結果の南無阿彌陀  
仏である。これが凡夫撰取の南無阿彌陀仏の教である。

○ しかし、我慢のやまんものを、どこ〜までも碎けてゆ  
くものに対して、心配するな、といふ。これは耳があつた  
ら聞える筈である。ところが、我慢の止まんのが可哀想で  
あるといふ兄貴の音が聞えないで、自分の喜ぶ喜ばぬ、等  
々ばかりに気が囚はれて、くらやみになつてくる者にとつ  
て、それにかかはらず、その暗闇に、他より光がさして來  
たのである。

○ 如來の御恩の高きことを仰がずして、ただよし、あしと  
いふことばかり申しあひ、自分のよしあしばかり立てて、  
何時までも我慢のやまぬ、罪の深いことに気がつかない  
で、自分はよくやつてゐると思つて自負してゐる時に、兄  
貴が思ひもかけず、

○ 「あいつの我慢のやまんのが可哀想である」  
と、他からはあきられてゐる者をすてないで愚痴をこ  
ぼした。

自分がよい気になつてゐても、どもならんのである。私の話はこれより外なんにもない。何も自分の我慢の止まんのを見てくれとたのまないが、その有様を見てゐて、黙つて居られず法界より出世なされ、衆生済度と自ら宣布なされしが仏教で、如来廻向の淵源は、この我慢のやまん一点のために、地獄に落ち行くのを見るにみかねて出て来たので、変な先生が出て来たものである。この世の中には、どこを探しても、極重悪人を救はずんばやまずと、どこくまでも捨てないといふ変な先生といふ者は居ない。

○ これはこの世に居る筈もなく、哲願不思議の術のはつれた底なしの物好きな先生である。

○ いかなることにならうとも、どこまでもすてないといふ教は真実、親鸞教である。

○ 自分の力できつと生かして見せるといふ信念も、子供がはかなく死んだ時は一遍に碎ける。その碎けてしまつた者に、それは無理ない。悲歎し、苦悩してゐる者に対して、それが可哀想なことであると、同情大悲の人は、この世ではある筈のものでない。

### 常音先生をお偲び申して

花田正夫

○ 先年のことであります。名古屋の山内君が近角先生を非常にお慕ひして、江州の西源寺に突然お参りをし、境内の写真などを持つて早速私を訪ねて来ての話に、

「先生のお墓は何処にも見出せず、釈常随法師の御墓が一つあるだけでしたので、前守番の老婆さんにきくと、常観先生も、常音先生も、お父さんの常随法師の墓にお骨が納めてあるとのことでした。本堂にびつくりしました。

○ 本堂の欄間に両先生の油絵の肖像画が掲げられ、柱などはピカピカに磨かれてゐました。…」

○ そこで私も次の打ち明け話をしました。  
「常音先生が江州に御帰省の時、私も二度御参りした。その時先生に『兄貴の墓はあそこだ』と教へられて、本堂の南側に行くと、古色蒼然とした墓碑が「基あり、常随法師と墓表に刻まれてあつて、常観先生のごは何処にも刻まれてありませんでした。そこで先生にお尋ねすると『み

ちつとも自分の信心のうまくゆくことのみをたのみ、仏の深い真実をよそにしてゐたのである。その者に対して自分のよいのに自慢するな、碎けるのを気にするな、悲しみ歎くなどのお慈悲である。

○ 山奥に親を捨てに行き、道々親が作つた道しるべを碎きくして来た子のために、迷はぬやうにと思つて親は枝折りくして居たのである。

○ 仏の御恩をはねのけくしてゐる者である。

○ 「弥陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」

○ これは私のおはこである。この「一人がためなりけり」の一人が私で、御慈悲を素直に頂いてゐるのではなく、親の親切を、ふみつけくしてゐたのである。

○ んな親から出たのだから親の墓へ骨を入れ、ばよいと云ふ兄貴の言葉に随つたのだ、わしもそこへ入るんだ」と微笑のうちに答へられた。

○ 今や両先生は、御父上、常随法師の墓に帰られて、さぞかし御満足のことであろう。そこに親鸞聖人が「我はこれ賀古の教信沙弥の定まり」と常は仰せられ、且つは「死骸は賀茂川に捨てて魚の餌食とせよ」と仰せられた『親鸞私なし』の無我の御姿そのまゝを知らされる次第である」と。

○ 信仰余瀝の附録に、常観先生は「よくく考へて見るに自分の善知識は父上であつた」と述べて居られるし、常音先生は何時にも「兄貴はわしを救ひにこの世に出てくれた」と仰言つて居られました。  
○ そして両先生が、師であり父であられる常随法師の中に

没入せられて、更に御名を刻まれず、一点の跡も留め給はぬ無私の御姿は、飛ぶ鳥の跡をとどめぬすがしさと申しませうか、はたまた白雲悠悠々として云来される御姿と申しませうか、唯々頭の下るばかりであります。

今や常音先生の六週忌をお迎へ申し、眼裡に深く刻まれて居ります、常随法師の墓碑を心に浮べ、叩頭礼拝申しますと共に、終日終夜、名聞と利養にのみ惑溺して更に省みようとせぬ垢穢汚染の醜態を照し出され、宝林壇上、御照覧の限りなき衰愍覆護の御涙に触れるのであります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

想へば私が常音先生の御導きを初めて頂きましたのは、昭和十六年の初秋で、太平洋戦争の直前でありました。その年の十二月に常観先生は遂に亡くなられたのであります。それでも私が御伺ひ申した日曜日には御衰弱はなさつて居られても、壇上にて、歎異抄の第四条、聖道浄土の慈悲について御講話下され、特に私のために池山先生が社会事業に身を投ぜられたけれど遂に聖道の慈悲に行き詰り、浄土の念仏に帰入せられた有様を簡結にお話し下さいました。次で応接室では、廿九歳の時の御自督を悦び溢れる御姿で御迷べ下さいました。それは、関東の同行を前に語られ

困るゝと歎息を繰り返してゐる自分であるといふことではありません。

そして、如来の大慈、本願のおこりは、その「我慢のやまぬ奴が可哀想である」と云ふ一点にある、と、先生は御自身の問題として、繰り返しまき返しお訓へ下さいました

私は三日間に亘つて、先生の慈語を蒙つて居ますうちに、段々肩の重荷が軽くなり、結氷した心も融け初め、ゆとりも出来、一応辞して帰りました。

これで、遠慮心、卑下心でお聞きさせてゐた私は、寒い風に凍えきつた身体が、温室で暖められてゆつたりした心持になれたのであります。ところが何時の程にか「これでよい」といふ横着心に知らぬ間に私が傾いたのであります。常観先生が常に繰り返された如くに、遠慮心と横着心、卑下と高慢は、表となり裏となり、或はあざなふ細の如く同一人の上になつてはるものであります。

常音先生には其後大阪の求道会に西下されます時、名古屋で一泊して頂き、幾度が御教を仰ぎました。そして戦争が激しくなつて旅行も出来ないといふ頃まで続けて頂きました。終戦後は焼野と変じた名古屋ではお迎へ申す所もなく、やつと一道庵が出来ましたので一度お迎へ出来たので

る聖人の歎異抄第二條の御姿「親鸞におきては……」に始まり「……愚身の信心におきてはかくの如し、このうへは……。」と続く思召しと全く一致し、而も御話し下さる先生は紅潮満悦の慈顔でありました。

斯くて常観先生は「私は病餘の身であるから、弟から聞くように」と云ひ残されて、学舎に帰られました。この日以来常音先生の御亡くなりになります日までは御懇篤な御導きを頂きました。

さて私がこの時、求道会館にお訪ねしましたのは、卑下の泥沼におちこんで、二遮も三遮もなくなつたからでありました。而も長年お慈育を蒙りました池山先生はすでに亡くなられて三年でありました。

常音先生は三日間にわたつて、微に入り細にわたり、或は斯うした実例がある、いや斯うした人も居ると、囁んで含める如く御導き下さいました。

それによりまして、はつきりと私に知らされましたことは「悪いから困るゝ」と言うてゐるのは、自分に大いに頼むところを持つてゐる。何時かは何とかなれるだろうと云ふ我慢があるからである。それが思ふ様に行かぬために

ありました。其間、先生の御目に、私の生温さが見え、如何ばかり御心労申させましたことか。ことに段々と先生の心臓病が悪化され、御衰弱が見える頃、先生の悲心は長時不絶の火と燃えて、  
「俺ももう長くは生きられまい。聞くことがあれば何でも聞いてくれ」

「真に聞いてくれる人があれば九州まででも行くよ」等々は、烈々たる悲心の片鱗でありました。それ等は皆ひとごとでなく、無道心の私のための仏の御涙でありました。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

先生のお亡くなりになります前年の歳末でありました。来春三月か四月には御来庵下さる由、奥様からお通知頂いて居りました。爾来私といたしましても、今度はいよいよ最後であらう、あの御衰弱では、と思ひますにつけて、一期一会、といふ緊迫感に胸せまるものがありました。さうして居りますうち歎異抄の一句、

「露命わずかに枯草の身にかゝりて……」

「同室の行者の中に信心異なることなからんために、泣くゝ筆を染めてこれを誌す、名けて歎異抄といふ……」が私の胸を打ちました。

この唯圓大徳の涙はそのまゝ常音先生の涙である。而も



その涙の根本は「異なるものを悲歎される」、それではいかにぬと捨てる善悪沙汰ではなく、それが可哀想だ、それだから見捨てられぬとの大悲切々の血の涙である。その御涙は一分一厘如何ともすることの出来ぬ私をたすけんがためと仰ぎ、迷情をもつて読む私には歎異抄の一言半句も本当には読めてゐなかつたのだ、唯自分に都合のよいところを勝手に繰り返してゐたのだ、……と次から次へと身に沁むと共に、嗚呼この唯圓大徳の悲心は、一言半句、読み間違ひしてやまぬ私を哀れと思召しての涙であると頂き、早速そのことを、御わびと御礼のつもりで先生に申上げました。すると先生が非常におよろこび下さつた由、ひそかに承り、胸つまるものがあります。

其頃から私の号を「聚墨」と決めました。聚はあつまる、墨はすみであります。これも『歎仏偈』に

「光顔巍巍として威神極りなくまします

是の如きの焰明ともひときぎものなし

日、月、摩尼、珠光の燦耀も

皆ことごとく隠蔽してなほし聚墨のごとし」

とありますところに、一文不知の我身を照し出されたからであります。

嗚呼、遂に、翌春、ほどなく先生は脳軟化症と云ふ難治

の御病氣になられ、東大病院であらゆる医学の粹を集めての御療養の甲斐もなく、昭和二十八年八月六日、御示寂になりました。

奥様から承りますと、御難病中に「兄貴が早く死んで淋しい」とホロ／＼と涙せられた時もありました由であります。又不治とお知りになつて会館に帰られての或日、しげ／＼と会館と学舎を眺められつつ「死にともないなあ」と独語せられたとも承ります。

愈々最後の時は、苦しい御息の中から三声念仏されて、息絶え終られた由であります。

私は今一度、常観先生と常音先生の御生涯をかへり見ます時、親鸞聖人と如信上人との関係を想ひ浮べるのであります。如信上人は御祖父聖人の教をそのまま御稟けになりそのまゝを覚如上人に口伝され、御自身は一部の聖經も書かれなかつたのであります。常観先生が何時も表に立たれ常音先生は常に裏を守られて異体同心、而も一篇の書も残されずに、満足されて亡くなられましたことに、如信上人を想到いたしますのであります。

さながらの道さながらに伝へませし

師の逝きまして六つとせの夏

## 恩徳広大近角両先生

昭和九年の春、寺の住職を譲り、六月上京。着京の翌日、妹に連れられて本郷の求道会館に参り、常観先生をお訪ねして、一時間ばかり私の告白やら、先生の御教誨を蒙り、辞退しました。

其後日曜毎に参り、聴かせて頂く中、私は最早隠居の身となつたのであるから、出来得れば、東京で生活したいと思ひ、常音先生に御相談しました。

先生は暫く待てとの御事で、其後先生の御紹介を頂き、新宿柏木の斎藤といふ菓子卸売店を訪問し、御主人、奥さん、御老母も快く御会談下され、遂に百人町で小さい家を探し出して下された。

借家に這入り、島根県から荊妻を喚び寄せました。そして真宗説教所と書いた相当大きな看板を、私が他出中、斎藤さんが持つて来てたてて下さつて、どうやら東京で暮せさうに思はれ、自策自勵して、毎年春秋彼岸の法座には、

## 三 瓶 徳 英

常音先生の御来講を乞ひ、秋は報恩講法座として、大久保近辺の真宗ひいきの各層の人々が御来聴下され、座談会に入信されたかと思はれた方も数々ありました。後に築地本願寺の許可と東京市の認可を得て、普通の説教所となりました事は、ひとへに常音先生の御恩恵の賜でありました。

先生に就いては種々の思ひ出があります。其一つは、疎開帰国後九年目に上京しました時、偶然先生の御往生、御葬儀に会はせて頂きました時、不思議な有難味を感じました。

又昭和十一、二年の頃と思ひますが、常音先生の御導師で、北村乗雲さんが御母堂の法事を営まれ、堀川さんと私が、招かれて、お経拝読の助音をして、先生の御法話がありました。「難信のこと」でありました。それから多くの

親戚の方々と共に、御馳走を頂き、お酒を沢山頂きました。時、難信に就いて私の昔の思ひ出話をしました。先生が腹を抱えてお笑ひになりました。

それは私の若き頃、七十歳位の農家の老人（藤原清吉氏）が大病に罹られ、私に法話してくれとの事で参りました。死の前々日でしたから苦し相に呼吸し乍ら話を聞いて居られましたが、フト申されるのに、あなたに一つお願いがある、叶へてくれるかと云はれ、それは何ですかと申しますと、小さい紙片に、南無阿弥陀仏と小さく書いて下さい、それを丸薬の様に飲んで、呑んで見ませう。さうすれば、南無阿弥陀仏を頂いた気持ちになれると思ひますと、苦しい息の中から途切れ／＼に言はれた姿が、いかにも真剣で、私はどうしたらよいかと暫時顧慮し、一寸便所へ行き、それから帰つて老人に答へました。只今の御希望に付き私がお名号を書いてよいが、丸薬にして呑んでも、肛門へ出ますよ、と申しますと。老人は考へ込み、出ては駄目だから止めなせうと申され、私が呑むのではなく、南無阿弥陀仏に呑まれるのだなど話したことがあります。申した時、先生衷心からお笑ひになつた事があります。

又其日帰途、説教所の相談旁々浅井鍵治郎さん方へ立寄つた処、大いに叱られ、坊主が法衣姿で赤鬼の様な顔して町を歩くとは何事だ、酒を慎みなさいと叱られ、私の放逸

又別の書物に三十三の過、三十五、三十六等の損失、あることを、お経や論釈で説き記され、財物空費、無節操、無慚無愧、耻知らず、秩序を乱す、悪友ばかりとなる、秘密の悪が絶えぬ、狂人じみて来る、自ら身を壊はす等の悪結果ばかり生ずるのが、酒の為であると書かれてあります。私は已前、煙草は十年間やめて居りましたが、僅かの動機からまた吸ひ出し、酒は死に臨んで居る只今も、少しづつ欲しい、狂悪漢であります。

良寛上人は、我詩は非詩の詩だと申されましたが、私は非僧の僧、非人の人、非道の道を往く浅聞しい、獅子身中の虫であります。常音先生が毎度業報について『蛇は人から嫌はれる業報によりて蛇に生れた』と聞かせて下さいました。そくばくの業を持ちける私を可哀想に思召し下さい、助けて下さる大慈大悲の親様、釈迦弥陀の護持養育を蒙りて現実を生かされ、永遠に死んでも死なない念仏生活を見せて頂いて居ります。

親鸞聖人は此行信に販命すれば撰取して捨て給はざるが故に阿弥陀仏と名け奉る。是を他力と云ふ。他力といふは如来の本願力なりと仰せられ、和讃には

地輪蠅成詐の心にて自力修善はかなふまじ

無慚、耽酒滋味、飲食無度、等々の仏語の鉄棒を以て頭腦を叩き潰された気がして、平あやまりにあやまつた事がありません。

其時より二十年も前に、田舎で無名の妙好人、谷口柳作老に、仏事の時には酒を過ぎぬ様にして下さいよと、親切丁寧に誠められた事があります。其時大経五悪段に関する書物を閲読して慚愧恐懼し、酒を廃めたいと一年間位努力しましたが結局駄目でした。

其時の事をノートに書いて居る。酒の害毒を少し計り書いて見ますと、

人々の第五の悪は、酒を飲む為に適度を過し、限りなき餘悪を作り出し、親も兄弟も親戚友人までが愛想をつかして、死んで仕舞へばよいと思ふ様になる。心に思ふことも口に言ふ事も身体の行動も、常に悪ばかりで、何人の誨にも反逆しながら、幸福と長命を望み求めて居るけれども、悩みと苦しみで一生を終るから、仏の慈誠に従はねばならぬぞ、との酒に就いての訓誡が第五の悪であります。

酒の害毒に付ての十過、一、顔色が悪くなる。二、力が少くなる。三、眼の視力が鈍る。四、怒りほくなる。五、仕事がいやになる。六、病気が発生する。七、喧嘩する様になる。八、評判が悪くなる。九、智慧が減少する。十、死後三悪道に墮する。

如来の廻向をたのまでは無慚無愧にてはてぞせん

と、私に慚愧懺悔を誨へて下さいました。

御聖教に「一念の懺悔よく億劫の重罪を滅す」と書いてあります。又、懺悔に二あり、一は向内、二は向外で、向内の懺悔といふは、自分自身の心の中で、既往ならびに現在の悪を思つて悔い、救はるる道を求めるから和讃に

真心徹到する人は金剛心なりければ

三品の懺悔する人とひとしと宗師はのべたまふと仰せられました。常観先生御著、『信仰の餘瀝』の中の「生ける懺悔」であります。

向外の懺悔は他人に向つて自己の罪惡を語り懺悔するけれども、口まで出れば真心から距離が遠くなつて、徹到味が薄弱になる事が多いと思ひます。

世は文明に酔ひ狂ひ、人は名利に迷ひ惑ふ、文明が眞の幸福をもたらすであらうか。立身出世が人間の願望のすべてを満足せしめるであらうか。曰く平和、曰く自由、曰く平等、曰く何々と、立派な看板を建て、其裏面は全然反対逆の思想行動をなす百鬼夜行の有様は実に情ない事であります。まことに五独惡世であります。併しながら獨惡邪見の私の為に、弥陀仏の本願念仏は成就せられました。

「信界建現」昭和九年一月二十日号に出て居る詩を常観先生御直筆で半折に書いて下さいました

終歳講題五十三 善財求道去趣南

百城正達明徳 靈界參同弥勒

の軸をいつも拝見してをります。そのころを

世はなべてかゞみなりけりよきをとり

あしきをすてて心みがかば

と歌にいたしました。

私は何も知らぬながら、詩や歌の真似がしてみたく、書いて居りますので、誌しまして皆様の御叱声を願ひます。

聖人の深き懺悔のお言葉に弥陀の絶対無限ほのめく

よき人の言の葉綴る古文はこころをてらす光なりけり

念仏者慈光はるかにかむりつゝ世のなりはひにいそしみ

生くる

人皆の救はるるみち唯一つ心の世界念仏する時

子はなくも親なき人ぞなかりける如来は慈父母、南無阿

弥陀仏

自炊自起臥 薪水山際恵 時書誦除草 仏慈光現前

出放題戯書、恐惶懺愧、愚人釈徳英、和南

## 山岡鉄舟語録 谷田左一著

鉄舟は四十五歳、明治十三年三月卅日に大悟し、滴水禪師の印可をうけた。誠に明治初期における維摩居士の面影を見る事が出来る。

然し文明開化の声は高く、西洋文明に幻惑した人々が、仏法の無力、無用、消極等をあげて排仏論を唱へた。その時鉄舟は毅然として

『天下拳つて他教を信じ之を排しても、我は独り仏教を信ずればよい』

と語つて居た。そして排仏論者に対しては

『己が驕慢心から出放題な放言をし、自らが迷妄霧裡に彷徨し、是非海中に浮沈してゐる六道論廻の一衆生であることを知らず、唯文明に酔ひ自由に溺れて「釈迦・孔子なんぞこの文明開化を知らんや」と豪語するも、一度、失職とか大病とか災禍にあふと、恰も煮湯におちた蜘蛛と同様である。……』

晴れてよし曇り、てもよし 不二の山

もとのすがたは かはらざりけり

うち合す剣のもとに迷なく

身を捨ててこそ生くる道あれ

## 檜山節考を見て

### 室住熊三

檜山節考と云ふ小説があります。映画にもなり、ベストセラーとして世間に持てはやされました。文学に縁の薄い私は娘のすゝめで此の小説を読み、家内と一所に此の映画を見ました。

これは姨捨山の物語りで私達の様な老翁が息子から山に捨てられる事を書いてあるものです。身につまされる物語です。どう云ふ所がこれほど評判になつたのか一寸解りませんが、姨捨山の話は私には誠になつかしい話です。

それは明治四十三年に田舎から上京して第一高等学校に入學して真先きに本郷森川町の求道学舎で近角常観先生から聞かされた話なのであります。

『正信偈』の中に

煩惱に眼障へられて見たてまつらずと雖も

大悲ものうきことなくして常に我を照らしたまふ

と云ふ有難い御言葉があります。これは私達が、毎日々々欲望の生活に迫ひまはされて、遣るせなき親様の私の

事を夜も風もやすむ時なく心配して下さる事に気がつかない、誠に勿体ない事だと云ふ意味であります。

私はさう云ふ境遇に居りましたので、一層この御言葉が身に沁み渡りました。唯一人の母親が故郷から夜も風もなく私の事を念じて下さつて居たのに、私はたまには思ひ出しました。常日頃は都会の風に吹かれて気もつかずに居りました。

近角先生は、この遣るせなき親心をこの姨捨山の老母にたとへて度々御教化下さつたのであります。自分は息子から山に捨てられる身でありながら、すこしも子供の事を恨まず、却つて子供の背中に負はれて山に行く途中、子供の帰りに道に迷はぬ様に、道しるべをしてやるのであります。田中絹代のおりんの姿が今も目にうつる様に思ひ出されます。

五分五分の心を離れた尊い親の心であります。私は長い事、卒業生の就職の世話をしました。が、さう云ふ時に、此方が苦心惨憺して居るのに学生の方では何にも気づ

かずに居る時、何時もこの遣るせなき母親を思ひ出させて頂きました。

こちらが知らないのは、それは無いのではなく、此方は知らないだけで、向ふ様は夜も昼も休む事なく私の事を思ひつめて居られるのだ。仏様があるとか無いとか言つて居るが、それはこちらが知らないだけで、仏様の方では、夜も昼も、私を見守つて下さるのだと気づかせて貰つたのです。

「仏と共にある」こんな力強い生活はありません。近角先生は「仏は真実の同情者だ」とも申されました。私が失敗した時に共に泣いて呉れ、私が成功した時に共に喜んで下さる方でありませぬ。

こんなことを繰り返して、まさかへし御話になつたのが、私の恩師、近角先生でした。誠に今思へば有難いことです。檀山節考を見て、四十七年昔の先生の事がなつかしく思ひ出されます。

「信ずるは力なり」と云う言葉があります。捨てられる身でありながら、おりんさんが毎日生き〜とした生活をして居る。これは山に行けば神様が待つて居ると言ふ強い信仰の力でありませぬ。これに引きかへて隣人、又またさんの生活は全く灰色の青ざめきつた生活です。未来を持つと云ふことは若々しい生活であります。青年は元氣一抔です。これはたのしい未来があるからです。老人の生活は氣力が無い、此れは未来がないからです。永遠の生命を持つた人は明るい。これは信心頂いた人です。おりんさんの、あのいそ〜とした生活は実に美しい。

### 法 信 抄

大阪市 葛原卓治郎

……慈光第十卷一号の近角先生の「信仰或問」の中に、穆山師の「思うてゐるだけわるい」との一言が百雷のやうにひびいて、私の今迄「仏が助けて下さると思つて安心していた」私の信仰はまるきり自分だのみで、頭の中に仏を造りあげて観念の遊戯をしてゐたことに氣付かされました、飛んで行きたいのですが病床動けず……。

第一信。  
み仏にすがる力の抜けはてて墜おちる奈落ならくに慈悲のみ光り。  
知らざりき奈落の底に弥陀仏の墜おちるこの身を待ち居給ふを。  
南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

鳥取県 辛川 忠雄

法然上人の御真影と山岡翁の詩歌便りたまはり謝し上げます。私は只今十日午後四時五十分、入院中の三男が心藏衰弱のため危篤状態に入り、只今独り寺に残つて病床感無量。死にについて深く反省、和顔愛語の不足を發見して面目ない涙にかきくれて居ります。「称我名字」の我の一字に大悲のふところに帰る我子をみ送り漸く明るさを覚えます。

滋賀県 西村 武三

……愚生も無事に、何事も御本願に乗托させて頂いて、日いばら日いばら

い。かうありたいものです。

別府に安波敷八と云ふ眼科医が居ました。近角先生の御教化をうけた人です。胃痛で死の宣告を受けたとき、「間に合つたと一信心を頂いて居た事をよろこび、友達から送別の宴をうけて、美しく彼の世に旅立たれたことを、大正の頃聴いて居ります。

「もう一年したら死なねばならぬ」全く恐ろしい事です。どんな立派な希望も皆灰色になります。悲観のどん底につきおとされます。

此の時  
「汝、一心正念にして直ちに來れ  
我能く、汝を護らん

総て水火の難に墮することを畏れざれ」

の御呼び声が聞えます。「間に合つた」と云ふ歡びは此処から出たのであります。

信仰は力であります。永劫の生であります。長生不死の神しさであります。私はこの映画の中から色々尊い信仰上の示唆を得ました。

皆様も一刻も早く、この五分五分の世界を離れて、かうした絶大の親心のある事に氣附かれる事を念願いたします  
昭和卅三年七月十九日稿。

追記。私はこの春、鹿兒島大学を六十七歳で停年退職いたしました。毎度慈光を御恵与頂きますので御礼の意味で誌しました。余白にのせて頂けば幸せです。  
鹿兒島市薬師町一三八〇の寓居にて

鹿兒島市薬師町一三八〇の寓居にて

の道をお念仏を生き杖として歩ませて頂いて居りますから御休心下さい。去る日洛西等持院に甲斐虎山先生、和里子様の老御夫妻にお目にかかり、九十一才の刀自から三首の短冊を頂きました。

流水。岩もあり木の根もあれどさらさらと  
たださらさらと水の流るる

聖人。ともしびを高くかかけてわがまへを  
ゆく人のあり小夜中の道

仙台市 田中 克己

……当刑務所は現在三十四名の死刑確定者が居り、仕事の上からも出来るだけ面会もし話し合ひたいと思ひます。ずいぶん学ぶ事も多く、發見することせうが、仲々困難なことです。副看守長のN君が面接簿を作つて刻明に誌して居ります。私も念おに読んで居ります。

石川県 田島 昌子

……近角先生の「婦命の一念」は父（橋地亀治郎翁）の存命中、繰り返して読んでくれましたが、今度慈光で拝読いたしました非常によく解らせて頂きました。……

愛知県 全勝 寺内

……私の父は近角先生に格別に親しくして頂いて居りましたので、常に求道を繰り返して聞かせてくれました。求道は私共の唯一のひかりでありました。ところが慈光の御縁を恵まれました、再び近角先生の御教を頂けますことは何と云ふ幸せでありませうか……

編集後記

本月六日は近角常音先生の六周忌になります。そこで、先生の特集号に近いものが自然に出来ました。常音先生の御写真につきまして、一筋に先生を慕はれる竹松英夫さんの手を勞しましたことは、嬉しいことであります。

△「常音先生聞記」は現在、直方市新町一丁目の吉田延世様が東京御在任中に毎日曜求道会館に参られて、日記として聞き書きせられたものであります。当時は、両先生は講義の題一つにして夫々お話し下さつた由であります。今回は常音先生の御話の記録だけを頂きました。

△「恩徳広大、近角両先生」は、島根県大家局区井田の三瓶師から、六周忌を前にして頂きました原稿であります。

三瓶師は何時も「私は妙なので、両先生を別々には思ひ出せません。何時でも、常觀先生を想ふと常音先生が現れ、常音先生を想ふと常觀先生が出て下さる」と申して居られます。

そのことは誠に尊いお姿で、常音先

生が常に「兄貴が、兄貴が」と繰り返されて、その動静、出沒、全く私心なき御姿が髣髴として浮ぶのであります。

更に真觀様が「学舎と会館のこと等々は、いつも父と叔父の心になつて考へてゐる」と申されてゐる由伝聞し、有難く、遠い流れを覚えるのであります。

△「至心廻向の意義」は、島根県での御法縁を中心とされた、真宗のかなめであります。宿善の熟された方々が、風に紅葉の散る如く、念仏の大河に浮ばれる姿、結局はよき師にお会い申すことの重大さを知らされます。

三伏の夏空を仰ぎながら、皆様の御健勝を念じ上げます。私には梅雨時が一番よくないので、炎暑はかえつてホツとするのが例年のならひであります。

白井先生は手術后、順調に御恢復と榊原徳草師から音信がありました。御入院後、手術の直前まで慈光誌への原稿を書き続けて下さいました由、名古屋から御見舞された横地国一様からも、榊原様からも、お報せをうけまし

た。

御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半。日曜例会。  
南区駈上町二丁目。一道会館。  
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル一丁半。  
名鉄、呼統下車。徒歩十五分。  
国鉄、笠寺駅下車、市電乗換。  
毎月廿四日午前午後、法話会。  
昭和区小椋町、教西寺。(桜花学園東北)  
市電、御器所通り下車。  
市バス、北山通り下車。

定価	一部	二十円(送共)
	半年	百二十円(送共)
	一年	二百四十円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷	名古屋市中種区千種町馬走二八	
発行所	名古屋市中南区駈上町二ノ三八	
	慈光社	
	振替口座名古屋一〇四七〇番	